

# 作品募集

あなたの体験

想いをことばに

## 第20回

# ふくい

# 風花

## 随筆文学賞

風花とは雪が舞い散る様子を花に例えたもの。  
この文学賞は、福井県出身の作家津村節子氏の  
随筆集『風花の街から』によったものです。

気比の松原 (敦賀市)

### 特別審査委員長 津村 節子

1928年 福井市に生まれる。  
1965年「玩具」で第53回芥川賞、1990年「流星雨」  
で第29回女流文学賞、1998年「智恵子飛ぶ」で第48  
回芸術選奨文部大臣賞を受賞、2003年「長年にわた  
る作家としての業績」に対して第59回恩賜賞・日本藝  
術院賞受賞。日本藝術院会員。2011年「異郷」で第37  
回川端康成文学賞、「紅梅」で第59回菊池寛賞を受賞。  
著書にふるさと五部作の「炎の舞い」「運咲きの梅」「白  
百合の崖」「花がたみ」「絹扇」ほか多数ある。

### テーマ部門 「二十歳」

第20回を記念して「二十歳」を  
テーマにした部門賞を設けます。

## 募集要項

- 内容 随筆自由部門(人とのふれあい、家族や旅の思い出、ふるさとへの思い、世の中の動きについて考えたことなど)  
テーマ部門「二十歳」(二十歳の思い出、二十歳への夢・希望、二十歳の誓い、など「二十歳」をテーマに考えたこと)
- 応募料 無料
- 応募資格 高校生以上
- 応募規定 A4判400字詰原稿用紙3~5枚。作品は日本語で書かれた自作、未発表のもの。新聞、雑誌、同人雑誌、インターネット上などに既に発表したもの、他の文学賞に応募したものは不可とします。ワープロ可。ただし、400字詰原稿用紙3~5枚に収まっているかを必ず確認してください。表紙に応募部門、題名、氏名(ペンネーム可ですが本名・ふりがなも併記してください。)、性別、住所、職業または学校名、年齢または学年、電話番号、公募を知った方法を明記してください。応募は郵送または電子メールに限り。電子メールによる場合は、作品を別ファイルで添付してください。※PDF可) 応募作品の返却ならびに選考経過についての問合せには応じません。
- 締切 平成28年10月31日(月) 当日消印有効
- 発表 平成29年3月上旬ごろ  
(入賞者に直接通知するとともに、福井新聞紙上に発表します。  
なお、発表後、ホームページ上に入賞者名を掲載します。)
- 著作権 入賞作品の諸権利は、主催者側に帰属するものとします。  
(入賞作品は、本文学賞の趣旨に沿って、入賞作品集や新聞、主催・共催団体等のホームページ・広報誌等で公表されます。)

- 審査委員 特別審査委員長 津村 節子(作家)  
委員 泉 志穂(福井新聞社文化生活部長)  
大河 晴美(仁愛大学人間学部教授)  
中島 美千代(作家)  
増永 迪男(山岳エッセイスト)  
向井 清和(福井県高等学校文化連盟)
  - 賞 (一般の部)  
最優秀賞 1名 30万円  
優秀賞 若干名 5万円  
U30賞 1名 5万円  
テーマ部門賞 1名 5万円  
(高校生の部)  
最優秀賞 1名 10万円(図書カード)  
優秀賞 若干名 3万円(図書カード)  
テーマ部門賞 1名 3万円(図書カード)  
佳作 若干名 5千円(図書カード)  
奨励賞 20名程度 3千円(図書カード)
- ※最優秀賞は、自由部門・テーマ部門すべての応募作品の中から選考します。

### 応募先

〒918-8113 福井市下馬町51-11  
「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会事務局(福井県ふるさと文学館内) 宛  
TEL (0776) 33-8866 Eメール: kazahana@pref.fukui.lg.jp  
URL: http://www.library-archives.pref.fukui.jp/

裏面に入賞作品を掲載しております。



## 義兄の遺品

福井県 清水 せき子

我が家の押入れの奥に、結婚以来一度も蓋を開けたことのない柳行李が納まっている。あめ色に変色した柳行李は、夫が結婚と同時に狭いアパートに持ち込んだもので、引越すたびに蓋も開けずにそのまま運ばれ、今の居場所に落ち着いた。

私も古希を過ぎ、柳行李同様古びてきた。なんとなく身辺を身軽にしておきたいと思うようになり、あちこちを片付け始めた。今はやりの断捨離である。

といっても、何代も続いた旧家というのではなく、一から始めた歴史の浅い家である。あるものといつてもたかが知れている。大して手間はかからない。少しずつ片付け始めて柳行李にたどり着いた。あの中には、義兄が身につけていた「ドイットンビ」というコートが入っていると聞いている。

義兄は五人兄弟の長男で夫の憧れの兄であり、夫とは親子ほど歳の差がある。生きていれば九十歳を幾つか超えているはずだ。

大学在学中に学徒出陣で満州へ出征し、のちシベリアへ抑留され体を壊した。帰国して養生したが、残念なことに惜しまれながら亡くなったということであった。私が結婚して一、二年を過ぎたころであったろうか。美しい女優さんと大蔵官僚との結婚が週刊誌を賑わし

たことがあった。大蔵官僚は妻を亡くしたあとの再婚ということだ。その数ヶ月後、正月に夫の生家へ集まり年賀状に目を通していたときのことである。

「Aさん(大蔵官僚)の噂を耳にするにつけ、亡き清水君のことが偲ばれます」と添え書きされた年賀状に目が留まった。義兄の友人から義父に宛てられたものであった。

義父は息子亡きあとも、二十数年に渡って息子の友人と賀状のやりとりを欠かさなかったのである。

息子の友人たちの活躍を知れば知るほど生きていければ一との義父母の思いは深まったであろうと、歳を経るほどに思う。その義父が長男の形見の品を、せめて一度でも袖を通してくれたらと末っ子の夫に託した。それがあの柳行李の中の品である。

正式な名称は知らないが「ドイットンビ」と呼んでいるコートは、金色夜叉の「貫一」や、シャーロックホームズの名介添え役「ワトソン」が身につけているマント風のコートであるらしい。残念なことに、風雅なライフスタイルとは縁遠かった夫は、一度も袖を通すことなく今日を迎えてしまった。

さて……あの「ドイットンビ」と柳行李をどうしたのか。

夫でさえ袖を通すことのなかったものを、娘や孫たちが使うことはあり得ないだろう。残しておいても戸惑うばかりだ。いずれどこかの時点で処分しなければならぬ。

その前に一度見てみたい。押入れから取り出し、そお一つと蓋を開けてみた。

初めてみる、義兄の遺品。

我われの結婚以来とすれば47年ぶり、義兄が亡くなったからずっとこの行李の中だったとすれば、実に70年ぶりに外気にあたるドイットンビである。

私は浦島太郎を生きたるコートを慎重に手にとり、思

いのほか古さを感じさせないコートを体に当て鏡の前に立った。

と、瞬間、義兄がコートを羽織って動き出したような錯覚を覚えた。

会うことの叶わなかった義兄だが、鴨居に掛かる遺影を何度も目にし、いつの間にか私の中に生きている。

今この場に彼がいれば何を語るだろう……。

向学心に燃え、あのころではまだ珍しかった大学生となり東京に学んだ義兄。年賀状を寄こしてくれた友人や週刊誌を賑わしたAさんたちと、ほとばしる情熱をぶつけ合い、この国の未来を熱く語っていたかもしれない。その青春の日にコート姿で通学したのだろうか。

恋人がいたと聞いていたが、愛する女性との逢瀬にも、このコートを羽織ってでかけたのだろうか。さらにこのコートを誂えたのが義母だったとすれば、もののない時代、田舎に住む義母はどうやって手当てしたのだろうか。

身につけるべき主を失ったこのコートを、柳行李に仕舞った義父母の心中をおもんばかりながら、今では知ることままならなくなった当時のあれこれを想像し、長く無言の時を過ごした。

「捨てればいいよ」と義兄はいつてくれる気がする。それでも……やはり、この品を今、処分することはできない。

せめて五人の孫たちに時をみてこのコートを見せよう。そして志を高く持ちながらも、戦争によって道半ばで散っていかざるを得なかった大蔵父がいたことを話して聞かせよう。

このコートをどうするかは、その後に決めればいい。私は充分に外気に当たったコートを、静かに元の場所に戻した。